

このような性質を利用して、各国でサポニンを含む植物のスクリーニングが進められている。

サポニンは溶血性をもち、細胞毒性が強いものもある。漢方薬として使われてきたものの中でも、その副作用が問題になったものもある。サポニンを薬用として利用する場合には、人間に対する安全性を確認する必要があるが、長い間、伝統的に使われてきたということは、その安全性を支持するものと考えられる。また、サポニンの薬理活性や毒性は化学構造によって、大いに異なる。昔からの伝承や経験を基にし、分離・構造解析・活性評価における最新の技術を活かした研究を行うことによって、安全で効能の高い医薬品としての利用の道が拓かれるものと期待される。

図書紹介

○アルビジア・パラセリアンセス両属樹木についてのワークショップ (Proc. of International Workshop on *Albizia* and *Paraserianthes* Species. Forests, Farm, and Community Tree Research Reports, Special Issue, Winrock International, Morrilton, Arkansas, 1997, 164pp.)

熱帯の天然林をまもるために、人工林と農地林で木材を含めた林産物をもっと積極的に生産すべきであるが、米国山林局と窒素固定樹木協会 (NFTA) は、このような趣旨で「多目的樹種とその利用」について国際ワークショップを開催している。その一環として、1994年11月13～19日にフィリピン、ミンダナオ島のビスリグで標記の2属についてのワークショップが開催された。本書はその際の論文集で、参加者38名の小集会ながら成果は大きかったそうである。植栽と利用(6篇)、スクリーニング(4篇)、アグロフォレストリーと農地植栽システム(3篇)、木材生産(5篇)、育種(2篇)の5区分(計20篇)に分けて発表・討議が行われたらしい。ビスリグは有名なPICOP社の本拠地であるが、まさにその本社で開催された。巻末の主要種のプロフィールには、*Albizia* 属21種、*Paraserianthes* 属3種が挙げられており、シノニム、分布、特性、用途、問題点などがごく要約的に述べられている。なおこのワークショップは、フィリピンに本拠をおくUNDP/FAO Regional Forest Tree Improvement Project (FORTIP) が共催しているが、かってフィリピン大学林学部で育種の研究から実践まで幅広く担当されていたZabala博士が企画・運営に参加されている。(浅川澄彦)